

異世界召喚されて

僕が
捨てられた
邪神

であることを誰も知らない
……たぶん。

2

著

レオナルド D

ill. ふらすこ



なくもりゅうや
南雲竜哉



きたがわちか
北川千花



にしみや かずは
西宮和葉



ひがしやま みこ
東山美湖

ウータの幼馴染

グラス・アクエリア

マーマン族の族長の娘。責任感が強い。



ステラ

ウータの旅に同行することになった少女。白い火を操る。



マリン

水を司る女神。全長二百メートル。すごく重い。



ムッシュ・ジョナスト

謎多き、さすらいの料理人。ちょっと変わり者。



はな ちる
花散ウータ

本作の主人公。16歳の高校生。異世界でのジョブは「無職」だったが、その正体はたまたま日本に受肉した最強の邪神。



登場人物紹介

プロローグ 海と幼馴染とサメ吉くん

「ウータ！ 早く来いよ、泳ごうぜ！」

その少年……花散ウータの脳裏に再生されたのは、いつかの夏の思い出である。

その日、ウータは幼馴染の四人と一緒に海水浴に出かけていた。

抜けるように澄んだ空から降りそぐ灼熱の陽光。潮の香りを帯びた風が爽やかに吹き抜ける。

砂浜は熱を帯びて焼けるようだったが、そんな足裏の感触すらも気持ちが良い。

目の前には青い海がどこまでも広がっている。太陽の光を反射して輝く海はまるで宝石。絶好の海水浴日和だった。

「うっわ……まだ冷たいなあ。でも気持ちいいぜ！」

幼馴染の少年……南雲竜哉が海パン姿で海に飛び込み、ワアワアと騒いでいる。

竜也は爽やかな顔立ちをした美少年だ。剥き出しになった上半身には無駄なく筋肉がついており、まるで男性モデルのような体型である。

「ちよっと、竜哉……ちゃんと準備体操をしないと足が彎るわよ」

呆れたように言いながら砂浜に現れたのは、同じくウータの幼馴染である北川千花である。

千花は薄水色のビキニを着ており、バスケットボールで鍛えたスポーティーな身体つきを惜しげもなく太陽の下で披露している。

「まったく、高校生にもなつてハシヤギ過ぎじゃない？」

「フフフ、良いじゃないですか。せつかくの夏休みですからね」

千花に続いて、二人の女子が現れる。

赤のトップフレアビキニを着ている東山美湖、白のワンピースタイプの水着の西宮和葉。どちら

もウータの大切な幼馴染だった。

「うっわ……」

「何よ、竜哉っちつてば、『うっわ』はないんじゃない？」

何故か顔を引きつらせている竜哉に、美湖がムツとしたように唇を尖らせる。

「いや……水着だなあつて思つてな……」

「海に来たんだから、水着くらい着るでしょ。当たり前でしょう？」

「そうなんだけどな……なあ、ウータ」

「そうだね、水着だねー。何だかとても新鮮な気分だよー」

竜哉に話を向けられて、ウータものんびりとした笑顔で頷いた。

竜哉がたじろいでいる理由は幼馴染の艶姿を目にしたからである。

千花、美湖、和葉……三人とも類まれな美少女であり、おまけにスタイルも抜群。

水着姿だったら去年も見ているものの、女としてさらに成長した彼女達の姿はあまりにも衝撃的だったのだ。

「三人とも似合っているね。すつごく可愛くて美人さんだよー」

竜哉のように動揺することなく、ウータが素直な感想を口にする。

ウータは基本的に空気が読めない。そうであるがゆえにお世辞を口にすることもないので、それは偽りのない感想なのだろう。

「そ、そう……嬉しいわ。ありがとう」

「ウータ君に言われるとね……照れちゃうかも」

「ありがとうございます。三人で買いに行つた甲斐がありました」

ウータの称賛を受けて、千花、美湖、和葉が照れ臭そうに頬を染める。

彼らをよく知る人間達にとっては公然の秘密であるが……この場にいる三人の美少女はウータのことが好きだった。

イケメンでスポーツマン、成績も良い竜哉ではなく、ウータに対して好意を抱いている。同じ高校に通っている同級生はそのことを不思議に思っていたが……ウータは特別だ。

平凡なのは容姿だけであり、実はこの場にいる誰よりも特殊な存在だったのである。

「さあ、準備体操をして泳ぎましょう！ ほら、みんなっ！」

千花が照れ隠しをするように両手をバタバタと振りながら言う。

「そ、そうねっ！ 溺れちゃ大変だもんね！」

「さあ、ウータさんも。竜哉さんも足が攀つたら大変ですよ！」

「はいはい、わかったよ……」

竜哉が残念そうに海から上がる。

五人は千花の掛け声に従ってしっかりと準備体操をする。そして……十分に筋肉を解ほぐしてから、海に飛び込んだ。

「わ、冷たい！」

「でも、気持ちがいいですね」

「やっぱり、夏休みは海だねー。千花っちの親戚がこっちで旅館やって良かったわー」

美湖がしみじみと言う。

夏休みに千花の親戚がやっている旅館に遊びに来て、海水浴を楽しむのは彼らの恒例行事だ。

小学生の頃は保護者同伴だったが、中学に上がってからは子供達だけでやって来ている。

「ウータさんは今年も浮き輪持参ですか？」

「意外よね、ウータがカナヅチだなんて。本当に泳げないの？」

和葉と千花が不思議そうに首を傾げた。

ウータは青色の浮き輪を腰に巻いており、プカプカと海を浮遊している。

ウータは決して運動神経が悪いわけではない。むしろ、マラソンなどの長距離走は竜哉や千花よりも速かった。

それなのに……どうして、泳ぎだけはできないのだろうか？

「うーん、何でだろう。僕もよくわからないんだけど、海に嫌われているのかもしれないね」

「いや、そんな悪魔のフルーツを食べたみたいに言われてもな……」

「でも、海底を走ったら超速いよ？ 竜哉、競争しようか？」

「いや、俺はそんな沈まないし海中で息もできないからな！ 殺す気か！」

竜哉が海面をバチャバチャと叩いて、笑いながら大声を出す。

仲良しだからできる、いつものやり取りだ。

ウータが本当に海底走りを披露すると、十分以上も息継ぎ無しで海底を駆け回る。そんなウータに幼馴染は舌を巻いていたのだが。

泳いで、スイカ割りをして、海の家でチープな昼食を摂って。

そうやって毎年恒例の海水浴を楽しんでいた五人であったが……そんなとき、ちょっとした事件

が起こった。

「なあ、君ら。俺達と一緒に遊ぶうぜ！」

「高校生？ スタイルも良いし、三人ともムチャクチャ可愛いじゃん！」

千花と美湖、和葉が男達に声をかけられたのだ。

たまたま、ウータと竜哉が女性陣から離れていたタイミングである。

日焼けをした三人組の男達は女性陣を囲って逃げ道を塞ぐと、ニヤニヤと笑いながら慣れた様子で距離を詰めてくる。

「海の家で何か食べない？ 焼きそばでもラーメンでも、なんでも奢っちゃおうよ？」

「何なら、晩飯も俺らの奢りでいいからさ」

「ホテル代も出しちゃうよー、なんちゃって」

どうやら、男達の目的はナンパのようだ。

「……ごめんなさい。私達は友達同士で遊んでいるので大丈夫です」

馴れ馴れしいナンパ男達に、千花が警戒した様子で答える。

千花の後ろで美湖も不愉快そうな顔になり、和葉が不安そうに表情を曇らせている。

「いいじゃん、いいじゃん！ ほら、こっちも三人だし数も合ってるじゃん！」

「うっわ、マジでレベル高い！ 高校生とは思えねえよ！」

「水着、超似合ってるね。スタイルも最高じゃん！」

千花が明確に拒絶するものの、ナンパ男達は引かない。

むしろ、どんどん距離を詰めてきており、今にも彼女達の身体に手を伸ばしてきそうだ。

今は三人とも海の中。浅瀬ではあるが、逃げ道はなかった。

「ちよっと……空気読んでよね！ 断ってるじゃん！」

「あの……困ります。やめてください」

美湖と和葉も拒絶の言葉を口にするが、ナンパ男達のニヤケ顔は変わらなかった。

「おいおい、失礼だな。人を犯罪者みたいに言うなよ」

「傷ついちゃったな。これはあれだ、メーヨキソンだわ」

「ちゃんとケアしてもらわないとな！ 慰謝料代わりに付き合えよ！」

さらに距離を詰めてくる男達。

三人が本気で身の危険を感じていると、トイレに行っていた竜哉が戻ってきた。

「お前ら……何やってんだよ！」

「あ？ 何だ、お前」

「その子達の連れだよ！ みんなから離れる！」

「チッ……男連れかよ。マジウゼだな」

ナンパ男達が鬱陶し(うつとく)そうに、虫でも追い払うように「しっしっ」と手を振った。

「俺ら、この子達と遊ぶ(あそ)ぶからどっか行けよ」

「空気読めよな！。ボコつちやうよ？ 俺、ボクシングやってただけど？」

「ガキが粹(い)がるなよ！ さっさと消えろ！」

「彼女達は俺の幼馴染だ！ 離れろって言っているだろ！」

竜哉が声を荒らげて、ナンパ男達を追い払おうとする。

ナンパ男達は鬱陶しそうな顔で舌打ちをした。

「チツ……面倒だな。本気でやっちまうか」

「二、三発殴れば大人しくなるだろ。ガキに現美を教えてやるよ」

一触即発。次の瞬間には殴り合いが始まりそうなピリついた空気になる。

竜哉は身体を鍛えており、それなりにケンカも強い。

だが……相手は年上。おまけに三対一という構図である。戦いになれば勝ち目はないだろう。

「ウオツ……!？」

だが……唐突に、ナンパ男の一人が消える。

ズルリと体勢を崩したかと思うと、唐突に海中に姿を消してしまったのだ。

「あ……何だ!？」

「ちよ……直哉、どうした!？」

何の前触れもなく姿を消した仲間に、他の二人が焦ったような声を上げる。

「げえっ……!」

「うおわあっ!？」

しかし……異変は続く。

残った二人もすぐに海中に引っ張り込まれて、竜哉らの前から姿を消していったのだ。

このままケンカに発展するかと思った矢先、海中にいなくなったナンパ男達。竜哉が啞然(あぜん)として

肩を落とす。

「な、何が起こったんだ……?」

「プハアッ!」

「わあっ!？」

海面が弾けて、何かが飛び出してきた。

竜哉が思わず声を上げて身構えるが……それは見知った人間。ウータだった。

「みんな、大丈夫かい？ 危なかったねー」

「ウ、ウータ？ ウータじゃない!」

「ウータ君!」

「ウータさん……！」

千花、美湖、和葉がパアッと表情を輝かせる。

竜哉が現れたときよりも、明らかに安心しているようだ。

「もしかして、ウータが助けてくれたの？」

「うん、そうだよ。みんなが大変だって思ったからねー」

千花の問いに、ウータが当然だと答える。

「海中で足を引っ張って、遠くまで運んでいったんだ。これでもう悪さはできないね」

「アハハハッ、さつすがウータ君！ 頼りになるー！」

「ちよつと可哀そうですね……自業自得ですよ。女の子に酷いことしようとしたんですから」

美湖と和葉が笑う。千花も苦笑している。

喜びと安堵、そして恋する乙女の顔。

華やいで声を弾ませている三人の美少女の姿に、竜哉が少しだけ目を伏せる。

「まったく……敵わないな……」

竜哉はかつて、千花、美湖、和葉の三人に対して恋心を抱いていた。

告白して、玉碎している……振られた理由は三人とも同じ。『ウータのことが好きだから』というものである。

三人から拒否されて理不尽を感じたときもあつたが……こういう場面に出くわすと、改めてウータは自分と違うのだと痛感してしまう。

（やっぱり、ウータは特別だな……コイツと一緒にいると、自分が平凡で何もできない背景のようにな気分になってくるぜ）

「よし……切り替える、俺！」

竜哉は自分の頬を叩いて暗い感情を吹き飛ばし、鬱屈とした気分から切り替える。

ウータの肩を叩いて、爽やかな笑顔で声をかけた。

「まったく……急に驚いたぞ、ウータ！ サメでも出たのかと思っただぜ！」

「ごめんごめん、ビックリしたかな？」

「まあな。ところで……アイツらはどこに行ったんだ？ まさか、海底まで連れていったわけじゃないよな？」

竜哉が何気なく問うと、ウータは穏やかな笑顔のまま答える。

「サメ吉くんに渡してきたんだ。後は上手いこと処理してくれるよ」

「は……サメ吉くん？」

「うん。さつき海底を散歩していたときに友達になったホオジロサメのサメ吉。あの人達を迷惑にならない場所まで連れていってくれるようにお願いしたんだ」

「結局、サメに襲われてんのか!? 生きてるよな、食われてねえよなっ!」
「大丈夫じゃない……………たぶん」

世界でもっとも、信用することができない『たぶん』である。

「ウータ、ビーチボールでもしましょう!」

「それよりも、砂遊びでもしない?」

「喉が渴いたし、日陰で休憩しませんか?」

「うんうん、良いね。一年ぶりの海なんだから満喫しないとね!」

千花、美湖、和葉らと一緒にあって、ウータが楽しそうに笑っている。

彼らの頭からは、先ほどのナンパ男達のことなど消えているようだ。もしかしたらサメの餌になっっているかもしれない連中などどうでも良いと言わんばかりの態度である。

「うっわあ……………ご愁傷様」

竜哉は若干顔を引きつらせながら、海に向かって手を合わせた。

あのナンパ男達はこれまでも色々な女性にちよっかいをかけており、婦女暴行で警察の厄介になっただこともあるそうだ。

彼らがその後、ビーチに現れることは二度となかった。

太平洋を隔てた遠い国で、サメに襲われた男達の死体が発見されるが……………損傷が激しく、身元は判然としなかった。

何ともあれ……………ウータと四人の幼馴染は、たった一度しかない中学三年生の夏を満喫したのであつた。

◇

◇

◇

「うにゃ…………」

ウータが目を覚ますと、そこには見知らぬ天井があつた。

いや……………知らないというのは正確ではない。

一応は知っている、昨日、チェックインした宿屋の天井だ。

「夢か……………んー、まだ外は暗いなあ…………」

ウータがいるのは宿屋の一室。窓の方に目を向けると、カーテンの間隙から見える外はまだまだ暗い。時計はないが、おそらくまだ深夜だろう。

「海かあ……………日本に戻ったら、またみんなで行きたいなー……………それにしても、海、水の

夢……………って、まさかあつ！」

ウータが夢うつつとしてつぶやいて、そこで「ハッ！」と布団を捲った。

もしやと思って確認してみたのだが、ベッドは濡れていない。お漏らしはしていなかった。ウータはホッとして胸を撫で下ろす。

「スウ……………スウ……………」

「僕も寝直そう」

隣のベッドから、一緒に泊まっている同行者の寝息が聞こえてくる。

ウータは再び布団を被って、目を閉じた。

(明日には目的地に着くかな……………楽しみだな、海の国かあ)

どこなどころだろう。

望んでやって来た場所というわけではないが、それでもやはり旅は楽しい。

ウータは行く先で待ち構えているであろう景色に思いを馳せて、スヤスヤと二度寝をしたのであった。

第一章 水の国に来たよ(一〜二日目)

花散ウータは邪神である。

かつては異次元を揺蕩っていた時間と空間の邪神…………『カーチル・ウータス』であった。

しかし、星辰の巡り合わせか、それともどこかのカルト教団が儀式でも行ったのか、地球という星の日本という国に住む平凡な夫婦の子供として受肉していた。

正直、最初は戸惑った。人間という下等な生き物の中に閉じ込められてしまったのだ。

肉体を破壊して、神に戻ろうかと思ったこともある。

けれど、人の目線で見ると世界の心地良さ、両親の愛情や友情を知ってしまったことにより、このまま人として生きていくのも悪くはないと思うようになったのだ。

だが……………そんな折に生じた新たな異変。

幼馴染の友人である四人と一緒に、異世界に召喚されてしまった。

元の世界に帰還する方法を考えるウータであったが…………『火』の女神とその眷属らに目を付けられ、命を狙われたことが切っ掛けでその手段を発見する。

地球に帰還する手段……それは『女神を喰らうこと』。

この世界を管理している六人の女神を捕食して、彼女達の力を使って肉体の強度を高めることである。

器である『花散ウータ』の肉体強度を向上させれば、人間のままでも邪神の力をフルに発揮することができる。時空神の力で元の世界に帰還することなど容易いことだ。

最初の石柱……『火』の女神フレアを食べたウータは次の標的を『水』の女神マリリンに定めて、マーマン族の国である『ウォーターランド王国』へと向かっていったのである。



晴天の空。青空には白い雲が悠然と泳いでおり、ちつぽけな人間を見下ろしている。

人間族の国の一つ、ウータと幼馴染を召喚したファープニル王国の国境を越えて、さらに西に進んでいくと……そこには大海原が広がっていた。

「おお……海だ！」

「海ですね、ウータさん」

はしゃぐウータに、微笑ましそうに白髪赤目のアルビノの少女……ステラが応じる。

ステラはウータの同行者だ。敵対していた『フレアの御手』のメンバーの一人だったが、色々あった末に元いた組織と袂を分かち、ウータと一緒に旅をしている。

「流石はウォーターランド王国だねえ。名前の通り、海がいっぱいだよ」

ここはすでに目的の国である。

世界を支配している六大神と戦うことを決めたウータはステラを引きつれて、ファープニル王国の西にある、『ウォーターランド王国』にやって来た。

魔法都市オールデンからはかなり距離があったものの、どうにか来ることができた。

丘の上に立ったウータとステラの視線の先には青々と輝く海がどこまでも広がっており、燦々と照る太陽の光を反射して宝石のように輝いている。

「青い海。白い砂浜。灼熱の太陽……うんうん、海水浴日和だね。日本にいた頃を思い出すよ」

「海水浴……ですか？ ウータさんの故郷には変わった文化があるんですね？」

ウータの言葉にステラが首を傾げた。

「どうやら、この世界では海水浴という文化がメジャーではないようである。」

「この世界にはないのかな？ 夏とかに冷たい海に飛び込むとすっごく気持ち良いよ」

ウータは日本での記憶を引っ張り出す。

幼馴染の四人と一緒に、毎年のように海に行っていた。

千花の親戚が海辺で民宿をやっている、夏休みのたびにそこに泊まりにいったものである。

中学上がった頃から女子がナンパをされるようになってしまい、強引なナンパ男を追い払うのに苦労したのも良い思い出である。

「思い出すなあ……ナンパ男を追い払うのを手伝ってくれた友達のサメ吉くん。元気にしているかなあ……あんまり人間ばっかり食べてないといいけど」

「……何故でしょう、『サメ吉くん』という言葉の意味はわかりませんが……すごく不穏な言葉が聞こえた気がします」

「大丈夫だよ。彼は最初こそ悪い子だったけど、僕がメツてやったら更正したからね。悪い人以外は襲わないように言い聞かせておいたから」

「悪い人は襲うんですね……やっぱり大変なことをしているじゃないですか……」

「大丈夫だって。ちよつと甘噛みするだけだって。女の子に不埒なことをする人はどんな目に遭っても自己責任だって、千花も美湖も言ってたよー」

「だったら、良いですけど……いえ、良いんでしょうか？」

ステラが「うーん……」と唸った。

ウータの交友関係は激しく気になるところだが……賢明なことに、ステラは気にしないことにしたらしい。キラキラと輝く海に目を戻した。

「今日は晴れていて良かったですね。ウォータールランド王国に来て、すぐに良い景色が見れるなんて幸先が良いです」

「そうだねえ……せつかく海に来たんだから、ちよつと泳ぎたいなあ！ ねえ、ステラ。泳いでも良いかな？」

「ハア、泳ぐんですか……別に構いませんけど、危ないですよ？」

「危ないって……溺れるってことかな？」

ウータに上目遣いで訊ねられて、ステラが困ったように眉を寄せた。

「アレですよ、ほら」

「へ……？」

ステラが沖の方を指差した。

そこにはちよつど漁をしていると思しき船が通りかかるところだったのだが……突如として海面から無数の触腕が出てきて、船に襲いかかる。

「わ！ 何かな、アレは？」

「海は魔物の巣窟なんですよ。浅瀬でも危険な怪物が出ることがありますし……この世界には海で泳いで遊ぶ人なんていませんよ」

「タコかな、アレは。サメ吉くんよりも大きいなあ」

ウータが暢気に言う。

海中から現れた怪物は吸盤のような足で船にしがみつき、そのまま水の中に引きずり込もうとしている。

あわやの危機。このままでは、船も乗っている人も海の藻屑もくずとなってしまうことだろう。

「お？ 何か出たよ」

しかし、海の中から別の何かが出現した。

人間サイズの『何か』が次々と出てきて、剣や槍で怪物の触腕を切断する。

海中でも熾烈しれつな戦いが行われているようだ。怪物が苦しそうに吸盤付きの足で海面を叩き、水中に消えていった。

「ああ、アレが『水』の女神マリンによって生み出された種族……『マーマン』ですね」

「マーマン……そっか、アレがそうなんだ」

ステラの説明を受けて、ウータがしげしげと『それ』を観察した。

海から出てきて船を助けたのは人間と似て非なる生き物である。青っぽい肌で、耳にエラ、掌てのひらに水かきを付けた人型の生物。

『半魚人』というほど魚っぽくはない。八対二の割合で人間と魚を混ぜたような魚人だった。

「海と共に生きている種族……マーマン。ウオーターランド王国はマーマンが住む国なんですよ」

「へえ……そうなんだ。すごいねえ」

「マーマンは御覧の通り、泳ぐのが得意ですから。この国では漁業が盛んで、年中美味しい魚料理が食べられるそうですよ」

「それは楽しみだねえ。久しぶりにお刺身が食べたくなってきたよ」

旅の醍醐味だいごみの一つは、やはり現地の料理を味わえることだ。

人よりも食い意地が張っているウータは、ジュルリと口からヨダレを垂らしたのであった。



ウオーターランド王国にやって来たウータとステラは、『陸』の首都である『フィッシュブルク』に到着した。

都の門をくぐるや、目に飛び込んでくるのは無数の人、人、人、人……。

海に面した港町であるフィッシュブルクはマーマン、人間を中心とした大勢の人で満たされており、溢あふれてしまいうさだ。

「うわあ……すごい人混みだね。どうしてこんな人がいるのかな？」

「ウータさん……それについては道中でしっかり説明したじゃないですか……」

人波に目を見開いているウータに、ステラが呆れたような顔になる。

それでも怒ることはなく、何度目かになる説明を始めた。

「ウオーターランド王国では、毎年この時期に『水』の女神マリンを崇める祭りが開かれるんです。祭りの会場はここ……『陸』の首都フィッシュブルクです」

『陸』って……この場所以外にも首都があるのかな？」

「はい。マーマンは海と共に生きている種族。陸と海にそれぞれ首都を持っているんですよ」
ステラが右手を掲げ、二本の指を立てる。

「マーマンには二種類います。陸に住んでいるマーマン、海に棲んでいるマーマンです。この場にいるマーマンはどれも前者で、外見も魚より人間に近い姿をしています」

大通りを歩いているマーマン……いずれも『魚っぽい人間』である。

「彼らは私達よりもずっと泳ぐのが上手くて、水中でも呼吸が可能です。しかし、水圧などのせいで海中で生活することはできないらしく、陸に首都を持って生活しています」

「フムフム。それじゃあ、海に棲んでいるマーマンは反対ってことかな？」

「はい、その通りです。海底にあるもう一つの首都に棲んでいるマーマンは水中で暮らすことはできませんが、長時間、陸にいることはできません。そのため、二つの首都があって住処を分けているのです」

「なるほどねえ。それじゃあ、海のマーマンはもっと魚っぽい外見なのかな？」

「そうだと聞いていますよ。ほとんど魚に近い容姿をしているため、見慣れない人には顔の区別ができないそうです」

陸のマーマンが『魚っぽい人』、海のマーマンが『人っぽい魚』というふうに分ければ、理解しやすいかもしれない。

「マーマンは女神マリリンが魚に知恵と人の姿を与えたことで生み出された種族であるされています。しかし、人に近づきすぎてしまって海中に適応できなくなってしまった者が現れたため、後から陸にもう一つの首都を建てたそうですよ」

「うんうん、ステラの説明はわかりやすいね。それじゃあ、そのお祭りっていうのはどんなお祭りののかな？」

「この都を与えてくれた女神マリリンに感謝を捧げるための祭りであるそうです。祭りの最終日にはなんと、女神マリリンがここに降臨するそうですよ」

「フーン……なるほどねえ。それは都合が良いなあ」

ウータが意味ありげに首肯する。

この旅の目的は女神を捕食すること。『水』の女神マリリンが祭りの最終日にここに来るといふのなら、それは渡りに船。ウータにとって嬉しい偶然である。

「それじゃあ、祭りの最終日まではこの町で過ごすことになるのかな？」
 「はい。祭りはすでに始まっており、最終日は一週間後になります。それまでは宿を取って滞在をしましょう」

「うんうん、良いね。せっかく時間もあることだし、お祭りを満喫しちやおつかない」
 ウータが緊張感のない緩んだ顔で言う。

女神を食べるといふ、この世界で最悪であろう大罪を犯しに来たとは思えない。非常にのんびりとした顔である。

邪気のない暢気さは、かえって邪神らしいと言えなくもなかった。

「観光も良いですけど……女神マリンについても調査をした方がよいと思いますよ。弱点などがわかれば戦いやすくなるはずですよ」

「ああ、いいね。そうしよつか……それじゃあ、とりあえずは宿屋を探そうかなー？」

ウータとステラは並んで大通りを歩いていき、宿屋を探す。

しかし……なかなか、空室のある宿屋が見つからない。

これだけ大勢の人がいるのだ。値段が手ごろな宿屋はどこも満室であり、二人が泊まる部屋が見つからなかった。

五軒目の宿屋でも部屋が空いていないと断られ、ステラが困った様子で肩を落とす。

「見つかりませんね……もうじき、日が暮れてしまいますよ」

「困ったねえ、どうしよつか？」

このままでは、野宿になってしまう。

旅の道中はずっとテントで寝泊まりしていたが……町に着いたというのに、野宿をするというのほでは避けたい。

「町はずれなら見つかるかもしれませんが……宿屋のランクが落ちるので、きっと汚い部屋ですよね。他のお客さんとの相部屋になるかもしれませんが」

「落ち着いて寝られないのは嫌だなあ。それに、飯は美味しいところじゃないと嫌だよ」

ウータは基本的に食いしん坊だ。百歩譲って大部屋で雑魚寝、風呂無しなどは我慢できるが……食事が不味い宿屋は困る。

「こうなったら、お金がもつたいたいけど高級なところにしちやおうかな……」

「キヤアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！」

諦めて宿屋のランクを上げること考慮していると、女性の悲鳴が聞こえてきた。

二人が振り返る。悲鳴は雑踏の向こうから聞こえてきて、数を増やしながら近づいてきた。

「ば、化け物だ！」

「どうして、魔物が街の中に……!」

「逃げる、食われるぞオオオオオオオオオオオオッ！」

悲鳴が続いて、通行人がどんどん逃げてくる。

ウータとステラが道の端に避けると、逃走する人々を追いかけて巨大な怪物が出現する。

「ブフォオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！」

のっしのっしと逃げ惑う人を追いかけているのは山椒魚さんしょうおに似た生き物だった。

太い胴体、短い四本の脚、ヌメヌメの液体で湿った体表。しかし、身体の大きさは象ほどもあって、人間をひと一呑みにできそうなほど口が大きい。

「あれ？ あの生き物もマーマンさんの仲間かな？」

「そんなわけないと思いますよ!? 普通に魔物に襲われているんじゃないですかっ!？」

「でもさ、この町はもうじきお祭りがあるんだよね？ これも出し物の一つかもしれないよ？」

「いや、みんな悲鳴上げて逃げてますけどっ!?! どう見てもお祭りを楽しんでいる人のテンションじゃありませんってっ!」

「そういう踊りの可能性もあるんじゃない？ 向こうの世界にあった牛追い祭りの可能性もあるし、あまり偏見を持つのは……………あ」

「ブモホオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！」

「うわああああああっ！ 助けてくれえええええええええっ!」

ウータが楽観的な可能性を挙げていると……………逃げていたマーマンの男性が怪物に追いつかれて、大きな口でパクリと食べられてしまう。

「食べられたね」

「食べられちゃいましたっ！ しかも、こっちに來ていますよっ!」

ステラが叫んで、涙目になってウータの後ろに隠れる。

「うーん……………人を食べたからって、悪い子とは限らないな」

友人のサメ吉くんを夢に見たばかりのため、今日のウータは動物に対して寛容かんようだった。

ステラをその場に残してテクテクと巨大山椒魚に近づいていき、手を差し出す。

「ぼら、お手」

「ブモウッ！」

「あ……………」

巨大山椒魚が大きな口を開け、ウータの身体をパクリと一呑みにしてしまった。

「ウ……………ウータさんンンンンンンンンンンンンンンッ!」

衝撃的な光景を目撃したステラがムンクの叫びのように顔の横に手を添えて、悲鳴を上げる。

親しい知人が怪物に丸呑みされるなど、トラウマになるような出来事だった。

「ブフォオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!」

ウータを丸呑みにした巨大山椒魚が大きく鳴いて、ペロリと舌を出した。
巨大山椒魚は次の獲物としてステラに狙いを定め、のっしのっしと接近してくる。

「う、ウータさんが食べられちゃった……」

巨大山椒魚が近づいてくるが……ステラはその場に腰を抜かしてしまい、逃げられなくなってしまった。

「ブモオッ！ ブモオッ！」

（いけない……このままだと、私まで食べられちゃう……！）

死を覚悟するステラであったが……直後、巨大山椒魚の身体に無数の槍が突き刺さった。

「え……？」

「そこで座り込んでいる貴女！ 早く逃げなさい！」

レンガ造りの建物の屋根から、見知らぬ女性が叫んでくる。

水色の肌をしたマーマンの女性だ。ビキニのように大胆な服を着ており、碧海のような色合いの髪を布で乱暴にまとめていた。

「撃ちなさい！ これ以上、奴らに町を好き勝手させてはいけない！」

「「「オオッ！」」」

建物の上に次々とマーマンの戦士が現れる。

武骨な筋肉をさらした海の男達が銃や槍を投げて、巨大山椒魚を攻撃した。

「ブギヤアアアアアアアアアアアッ！」

巨大山椒魚が苦悶の声を上げながら、苦しそうに身体をよじる。

ステラはその隙をついて、這うようにして窮地から逃れた。

「よし、効いている！ みんな、そのままやつつけて……！」

「ブギイイイイイイイイイイイイッ！」

「えっ……!？」

マーマンの女性が追撃を仕掛けようとするが……そこでまたしても異変が生じる。

「ブフギヤアアアアアアアアアアアアアッ!？」

巨大山椒魚がムックリとした顔を上に向けて、炎を吐いたのだ。

「ま、まさか……シリザードが炎を吐くなんて……もしかして、変異種なの!？」

空に上がる火柱を見て、マーマンの女性が愕然とする。

しかし……その直後、炎を吐いた巨大山椒魚がプスプスと煙を口から噴きながら倒れた。

「ブ……ギャ……」

大通りに横たわった巨大山椒魚は弱々しく鳴いて、そのまま動かなくなった。

マーマンの女性が警戒を解かないまま屋根から降りて、横たわる巨大山椒魚に近づいていく。

「死んでいる。これはいったい……?」
「うわー……ベトベトになっちゃったよ。勘弁して欲しいなあ」

「は……?」
倒れた巨大山椒魚の口がもごもごと動いて、一人の少年が這い出してきた。
言うまでもないが……先ほど、呑み込まれたはずのウータである。

ウータは全身を唾液でベトベトにしており、「うえー」と嫌そうな声で呻きながら、自力で外まで脱出してきた。

ウータは先に呑み込まれた男性を小脇に抱えている。近くにいたマーマン達が慌てた様子で男を受け取り、治療のためかどこかに運んでいった。

「ちゃんと火は出たけど……やっぱり、他の神様の権能を使いこなすのは大変だなあ。全然、火力調整が上手くいかないや。まともなパワーアップといえば、身体の強度が上がったことくらいじゃないかな?」

「ウータさん！ 平気ですかっ!？」

「貴方……生きていたのね、大丈夫?」

唾液まみれのウータに、ステラとマーマンの女性が駆け寄ってくる。

「ああ、大丈夫だよ。心配かけてごめん。ちよっと服がベトベトになっただけだよ」

「本当に心配しましたよ……正直、死んじゃったのかと思いましたが」

ウータの強さは知っているが、怪物に丸呑みにされるのを見てしまったステラは涙目である。

ウータは申し訳なさそうに頭を掻いた。

「ごめんね、心配かけちゃって。これからは丸呑みされないように気をつけるよ」

「本当に、気をつけてください……!」

「うんうん。だから泣かないでね。僕が悪かったよ」

珍しく焦った顔でステラを慰めるウータ。二人に向けて、マーマンの女性が話しかけてくる。

「どうやら、無事のようなね……でも、シーリザードの唾液は強い酸性だから、早く洗い流した方が良い」

「お姉さんは誰かな?」

「私の名前はグラス・アクエリア。自警団のリーダーで、この町の領主の娘だよ」

「領主の娘って……つまり、偉い人かな?」

「一応はね。でも、硬い話し方は好きじゃないんだ。気楽に話してくれて良いよ」

マーマンの女性……グラスが穏やかに頬を緩めて、親しげに笑いかけてくる。

「それはそうと……早くシャワーで身体を洗うといい。そこに私の知り合いが経営している宿屋があるから、部屋を借りなさい」

グラスが近くにあった建物を指差す。

三階建ての宿屋は高級そうなたす、いかにも高級旅館といった雰囲気だ。

「素敵な宿屋ですけど……ちよっと、旅費が……」

「心配しなくても、私の名前を出せばタダで泊めてくれる。君達は祭りを見に来たのかな？」

「その少年のおかげで、シーリザードの被害が軽くて済んだからね。祭りの終わりまでの一週間、宿賃はこちらで持たせて欲しい」

「良いの？ やったあ！」

ウータが両手を上げて喝采する。

ちよとど、宿屋を探していたところだ。高級宿をタダで泊まらせてもらえるなんて、渡りに船どころか豪華客船が来たようなものである。

「それじゃあ、お世話になります」

「ああ。私に用事があったら、丘の上にある領主の屋敷まで来てくれ。仕事のとき以外はそこにいるだろうから」

「グラスさーん！ 向こうにも魔物が出たみたいですよ！」

「わかった、今行く……それじゃあ、また！」

別の場所でも魔物が出てきたらしい。マーマンの戦士に呼ばれて、グラスが走っていく。

「親切なお姉さんだったね」

「はい……それにしても、魔物がそんなたくさん出るなんて物騒ですね」

「そうだねえ。海辺の町だから、海の魔物が出てくるのかな？」

二人は首を傾げながらも、グラスに紹介してもらった高級宿屋に入ってしまったのである。

◇

◇

◇

グラスの名前を出して事情を説明すると、宿屋の最上階にある部屋を用意してくれた。

さすがは領主の娘ということだろうか。顔が広いようで、宿屋のスタッフはとても丁寧な対応で迎えてくれた。

案内された部屋はリビングと寝室、シャワールームとトイレが完備されたツインルーム。

窓からは絶景のシービューを望むことができ、もしも正当な価格で宿泊していたら一泊で手持ちの路銀が吹き飛んでいただろう。

「フウ……気持ち良かった。生まれ変わった気分だね」

部屋付きのシャワールームで巨大山椒魚の唾液を洗い流して、ウータがバスローブ姿でリビング

に戻ってきた。

「バスローブなんて初めて着たよー。何だか、お金持ちにでもなったみたいだね」

「おかえりなさい。お茶を淹れておいたのでどうぞ」

「ああ、ありがとう。喉が渴いていたところだから助かるよ」

ウータが少し冷めたお茶を一気に飲み干した。

この町はかなり気温が高めだったので、冷めたお茶がちょうどいい。ほど良い水分が身体に沁み渡るようだった。

「フー……美味しいね。このお茶、なんか深みがある気がするよ」

「部屋に置いてあったアメニティですよ。こんな高級なお茶がサービスで付いているだなんて、こんな部屋にタダで泊まらせてもらって良いのでしょうか？」

「良いんじゃないかな？ マーマンのお姉さんがそう言っているんだから。『他人の金で食べる飯は美味い』って言うし、たっぷり堪能させてもらおっか」

遠慮がちなステラに対して、ウータは会ったばかりの女性に甘えるつもり満々だった。

サービスのお茶もしっかりお代わりしている。

「あの女性……グラスさんに感謝しなくてはいけませんね。もちろん、怪物を倒してくれたウータさんにもですけど」

「そうだねえ。ところで……『水』の女神がこの町に来るのは一週間後なんだよね？ それまで、どうやって過ごそうか？」

ウータがソファに座って、滞在中の予定について切り出した。

「確認だけ……一週間後のお祭り最終日にならなくちゃ、女神は出てこないんだよね？」

「はい、そう聞いています」

ステラが即答する。

ウータがシャワーを浴びている間、ステラは外に出て地元の人から話を聞いていた。

祭りは今日を含めて七日間。

始まりから六日目までは、海からもたらされる恵みや安定した生活があることを感謝して、大いに騒いで盛り上がる。

七日目の夜に『水』の女神マリンが海から現れて、この町に住んでいる人々に祝福の言葉を与える。住民は最大限の敬意と歓迎をもって女神を歓待するというのが祭りの流れである。

「マリンは海の底にある神殿にいるそうなんですけど、正確な場所はわかりませんでした。闇雲やみぐもに海に探しに出るよりも、祭り最終日を持った方が堅実だと思います」

「そうだねー、ステラの言う通り。それじゃあ、七日間の過ごし方を決めよっか」

ウータが両手を合わせて、ニコニコの笑顔で首を傾げる。

「やっぱり観光はしなくちゃね。美味しい物を食べたいし、景色が良い場所があるのなら見に行きたいよねー」

「遊びに来たわけではないんですけど……まあ、私も同感ですね」

そもそも……ステラはウータの目的に付き合っているだけであり、旅をする理由も女神と戦わなくてはいけない理由もない。

ウータがそうしたいと言うのであれば、拒否する理由はなかった。

「観光と女神について情報収集。それから、旅の路銀も稼がなくちゃいけませんね」

「路銀って……あれ、お金なかつたっけ？」

「七日分の宿賃が浮いたことですし、すぐに尽きるというわけではありませんけど……それほど、余裕はありませんね」

ウータがファープニル王国の国王から受け取った金はいくら残っているが、途中の宿泊費用や食糧費、道中にあつた関所を通るための通行税などで削れていた。

宿代を節約できたおかげで、この町にいる間は大丈夫だろうが……今後も旅を続けていくのであれば路銀を稼ぐ必要があつた。

「そっかあ……それじゃあ、お仕事も探さなくちゃね」

「はい。私も一生懸命働きますから、一緒に頑張りましょう」

そこまで話していたところで、部屋の扉がノックされた。

「ルームサービスです。お食事をお持ちしました」

「ああ、ウータさんのお腹が空いていると思つて頼んでおきましたよ」

「さつすがステラ！ 痒いところに手が届くね！」

ウータが快哉の声を上げて、部屋の扉に向かう。

宿屋のスタッフがお辞儀をしながら入ってきて、トレーから取り出した料理の皿をテーブルに並べていく。

「食事が終わった頃合いに伺います。ごゆっくり、お召し上がりください」

「うん、ありがとねー」

「それでは、失礼いたしました」

頭を下げて、スタッフが部屋から出ていった。

テーブルに並べられているのは魚料理が中心だった。白身魚のムニエルに貝の Pasta、エビの香りがするスープ。どれも美味しそうである。

「すごい……美味しそうですね」

「うん！ それじゃあ、この町に来て最初の夜だ。乾杯しよっか！」

ウータがグラスに入ったフルーツジュースを掲げた。ステラも同じようにグラスを手取る。



「乾杯！」

「乾杯」

二人はグラスを合わせてチンツと音を鳴らし、食事に手を付けた。
フィッシュブルクに到着して最初の夜。磯いその匂いと潮騒の音色に包まれた夜は、賑やかに更ふけて
いったのであった。

◇

◇

◇

二日目。

朝から宿屋を出て、二人はさっそく行動を開始した。
まだ町に来たばかりの二人はとりあえずフィッシュブルクの町を見て回ることにして、大通りへ
と繰り出した。

昨日と同じく、大通りには大勢の人が行き交っている。祭りの最中ということもあって、町全体
が風船のように浮かれた空気に包まれていた。

「やっぱり、人が多いね」

「そうですね……朝だから、昨日ほどではありませんけど……魔物が出たのを忘れてしまったので



しょうか？」

「まあ、お祭りだからね。そんなものじゃないかな……それで、これからどこに行こうか？」

「えっと……ちよっと待ってくださいね」

ステラがポケットからガサゴソと一枚の紙を取り出して広げる。

「何かな、それは？」

「町の地図です。宿屋のスタッフさんからいただいたんですよ」

それは観光客向けに宿屋が配っているものらしい。

流石は一流の高級宿とでも言うべきか。サービスが行き届いている。

「この地図によると……フィッシュブルクの町は大きく四つの区画に分かれています。東側に宿屋や店が並んだ市街地の区画。北側の高台に領主の屋敷や兵士の詰め所などがある区画、南側に神殿がある区画、西側に港と魚市場がある区画です」

「昨日、会ったマーマンのお姉さんがいるのは北の区画ということだね？」

「はい。女神について調べるのなら南の神殿へ、買い物をするのなら東の区画へ、路銀稼ぎのため仕事を探すのなら西の区画に行くとうい宿屋の方がおっしゃっていました。港では漁や魔物退治の手伝いを常に募集していて人手不足らしいですよ」

「なるほどねー。それじゃあ、今日のところは市街地を見て回ろっかなー」

ウータがのんびりとした足取りで市街地を歩いている。

大通りにはいくつもの店が軒を連ねており、露店も数えきれないほど並んでいた。

食べ物売っている店もたくさんあり、食欲を誘う匂いがある。

「まずは朝ごはんだねー。何か食べよっか」

「はい？ 朝ごはんって、モーニングは宿屋でも出ましたよね？」

「トーストとか軽い物だったからねー。あれじゃあ、お腹が膨れないよー」

ウータは見た目によらない大食漢。高級宿の上品な朝食では物足りなかったらしい。

「いっぱい食べ物屋さんも並んでるしさ。そこで食べようよ」

「まあ、ウータさんがそうしたいのなら……」

「決まりだねー！」

二人は店を物色しながら、大通りを歩いていく。

あちこちから香ってくる匂いに鼻をスンスンと鳴らしていき……目を付けたのは、人間が丸ごと入りそうなほど大きな鍋をかき回している店である。

「すみませーん、コレって何ですかー？」

「ん？ ああ、これはシュリーバイサンダーの肉入りスープだよ」

「しゅり、ぷいさん？」

店主の男性に訊ねると、聞いたことがない単語が返ってきた。
ウータがステラの顔を見ると、彼女も知らないようで首を横に振る。

「ハハハ、海鮮の一種だよ。ちょうど良い塩梅に出汁が取れたところさ。食っていくかい？」

「へえ、美味しそうだね。ステラも食べるよね？」

「はい……あ、私はちよつと少なめで」

「あいよ、お待ち」

店主の男性がスープを器に盛り、金と引き換えに二人に手渡してくれる。

器の中には琥珀色のスープが入っており、大きめにカットされた肉が浮かんでいた。

鼻をくすぐってくるのはエビとカニの中間のような香りである。食欲を誘う匂いにゴクリと二人の喉が鳴った。

「「いただきます……！」」

二人が同時にスープに口を付けた。

舌の上にスープが流れ込んできて、途端に口いっぱい芳醇な魚の風味が広がっていく。

とんでもなく濃厚な旨味が味蕾の全てを刺激して、そのまま喉を通して胃の中を温かく満たしていった。

「美味い……！」

「美味しいです……！」

「お、嬉しいねえ。気に入ってくれたかい？」

二人の絶賛に、露店の店主がニカッと嬉しそうに笑った。

「何というか……すごい濃厚だよ。味付けが特別スパイシーというわけじゃないのに、旨味がたつぷりで満足感がすごいよ」

「出汁がとても効いていますね……このお肉もプリプリで軟らかいです……！」

「ねえ、店主のおジサン。このお肉……シユリシユリサイダーって何なのかな？」

「シユリーブイサンダーはシユリーブイサンダーだよ……まあ、珍味の類だからな。他所から来た人は知らないか」

店主がトングを大鍋に入れて、何かを引っ張り出す。

「ほら、これがシユリーブイサンダーだよ」

「「へ……。」」

取り出された『それ』を目にして、ウータとステラが言葉を失った。

強引に引っ張り出されたのは人間の上半身……いや、人間とよく似たフォルムの異形だった。

その人型はワカメのような海藻をまとい、拳サイズの大きな単眼が顔の中心でギョロギョロと蠢いている。

「ミギャアアアアアアアアアアアッ！」

裂けた口が開いて、中からウツボに似た形状の舌(?)が飛び出してくる。

まるでパニック映画に登場するモンスターだ。見ていただけで生理的嫌悪が湧き上がってくるような姿をしている。

「ミギャアアアアアアアアアアッ！」

「すごい鳴いてるんだけど、それ……まだ生きてないかな？」

「活きがいいだろう？ 生きたまま煮込むと、良い出汁が取れるんだよ」

ウータの間に店主が笑顔のまま答える。

その食材はどう最^{ひい}屑^{きめ}目で見ても魔物。エイリアンのような化け物である。

「ああ……それでお客さんが全然いないんだね……」

そこでウータはようやく気がつく。とても美味しそうな匂いを漂わせて鍋をかき回しているその露店の周りには、まるで人がいないことに。

地元の間人が遠巻きにこちらを見つめており、「うわあ……食ってるよ……」という気味悪そうな表情をしていた。

「あ、アレがスープの……の、飲んじやった……お肉も食べちゃった……」

「わっ！ ステラ！」

ステラがスープを落として、「キュウ……」と失神してしまう。

ウータが慌ててステラの背中を受け止める。

ステラはエイリアンを食べてしまったことがよほどショックだったのだろう、目をグルグルと回

していた。

「ミギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！」

「あ、逃げやがった！」

その隙を突いて、鍋からシュリーブイサンダーが飛び出した。

鍋に隠れていた下半身……そこにある無数の触手を蠢かして、大通りを走って逃げていく。

「クソッ……待ちやがれ！ 逃がすかつ！」

店主が包丁を握りしめて、シュリーブイサンダーを追いかけて走っていく。

「ええ……何、この状況……」

「きゅう……」

ウータはステラを抱きかかえて、困り果てた顔で店主の背中を見送ったのであった。



立ち読みサンプル
はここまで

「ウウツ……酷い物を口にしてしまいました……」

「まあまあ、美味しかったんだから良かったじゃない」

異形の怪物を食べてしまったことで気絶したステラだが、十分ほどで目を覚ました。

まだ顔を蒼褪めさせているし、脚もフラついているが、どうにかウータの支え無しでも歩くことができそうだ。

「それにしても……さすがは異国だね。食文化もまるで違うみたいだ。あんな食べ物があるなんて知らなかったよ」

「異文化という次元で片付けて良いことではないと思いますけど……いえ、私が口を出すことではありませんね」

ステラが深い溜息を吐いて、気分が悪そうに口元を掌で押さえた。

「気持ち悪いのなら、口直しに何か飲むかな？」

「そうですね……フルーツとか食べたい気分です」

「あ、良いね。僕もデザートとか食べたかったんだよね。どこかに良い店はないかな？」

ウータが周囲を見回した。すると、少し離れた場所の露店に鮮やかなフルーツが並べられているのを発見する。

「ちょうど良いね。あのお店でフルーツジュースを売っているみたいだよ」

「ああ……口直しにピッタリですね」

その店は小ぢんまりとした小さな店で、二十代ほどの若い女性店員がやっていた。

女性店員はマーマンだった。青い肌、水掻きがついた手で金属製の調理道具を器用に操り、赤い色のフルーツから果汁を搾り出している。

「あ、いらっしやいませー」

「二つ、ください」

「はいはい、ちよつと待ってくださいねー」

ウータがピースサインで注文する。女性店員が笑顔でジュースの準備を始めた。慣れた手つきで作業をする女性店員に、ステラが恐々と話しかける。

「あの……そのフルーツはフルーツで良いんですよね？」

「はい？ もちろん、そうですね？」

「実は魔物が化した物とか、怪物の卵とかじゃありませんよね？ 急に大声で鳴いたり、触手が生えて動き出したりしませんよね？」

「いや、しませんよ!? 何をおっしゃっているんですか、お客さんっ!」

どうやら、ステラは先ほどのスープがトラウマになっているらしい。

必死な様子のステラに女性店員が困惑した顔になっている。